

貴布禰社は水神岡象女の神なり。夫伊弉諾尊軻遇突智をきりて三段とし、其ひとつを高とぞ申ける。此垂迹はや

まとの丹生社と団体なり。皆龍徳の降迹にして、今も雨を請雨を止る事を祈るには此二神なり。

社司どもきぶねに参りて雨ごひせしついでによめる

新古今 おほ御田のうるほふばかりせきかけて井せきにおとせ河上の神 加茂幸平

千載 貴船川玉ちる瀬々の岩波に氷をくだく秋の夜の月 俊成

夫木 秋風の吹夕ぐれは木船山声をほにあげて鹿ぞ鳴なる 成助

梶取社は、二瀬の里の北に貴船の一の鳥居あり、其かたはらにしづめます。神代のむかし万の神木船にのられしとき、

かちをとりし神とぞ。

足酒石は木船川の中にあり、宇治橋姫貴船へまうで此石に休ひ足を洗しなり。

螢石は木船くらまの落合川より南にして、■にあり。

和泉式部夫の保昌とかれくになりける頃、此社にまうで、螢の飛を見て

後拾遺 物思へば沢辺の螢も我身よりあくがれ出る玉かとぞ見る 和泉式部

とぞ詠げれば、御との、中より男子の声にて

後拾遺 奥山にたぎりて落る瀧津瀬の玉散るばかり物なおもひぞ 貴船明神

式部しきぶその、ち巫かんなきをかたらひまつりさせけるに、保昌やすまさほのかにき、社の木蔭に立か
くれ見侍りしに、巫となふるにたゞあらぬわざし給へといへば、式部かほうち赤めて

千早振神の見るめもはづかしや身を思ふとて身をやすつべき 和泉式部

とよみ侍りければ、保昌やすまさもあへず其こ、ちの優にいとやさしくおぼえて、則式
部をぐしてかへり、なほ浅からぬむすびしけるとなり。